

第8期会長から

学会活動のあるべき姿



羽島 良一*
Ryoichi HAJIMA*

これから二年間、会長の任にあたることになりました。経験不足ゆえに至らぬところが多々あると思いますが、ご指導ご鞭撻よろしく申し上げます。

今回、学会の運営に責任を持つ立場となり、日本加速器学会の活動のあるべき姿について、あらためて考えてみました。

本会の目的は、定款にも示されていますように「加速器科学、加速器技術およびこれ等に密接に関連する学問の進歩発展を図り、もって社会に貢献すること」です。マネジメントで有名なドラッカーが、「非営利組織のミッションは人を変え、社会を変えること」と著したのは、学会の定款と呼応しています。では、人を変え、社会を変えるために、われわれは何から手をつければよいでしょう。

現存する最古の学会と言われる王立協会は1660年にロンドンで設立され、ニュートンやラザフォードといった著名な科学者が会長を務めたことでも知られています。その設立にあたっては、“Nullius in verba”（ラテン語で「言葉によらず」）をモットーとし、教会や為政者の権威＝「言葉」とは一線を画して実験や観測の事実に基づいた議論を重ねることが科学の発展につながるの考えを示しました。われわれの活動もこれに倣うことができるでしょう。年会および学会誌において質の高い科学的議論を示すことが何より重要です。私は、年会の運営、学会誌の編集について、担当幹事と協力して継続的な改善を心掛けますが、議論の主役である会員の皆様にも一層の自覚と努力をお願いいたします。

学会内部で積み上げた議論をもとに、学会の外に向けてコミュニケーションを図る手段としては、webを中心とした広報、市民向け講演会、他学会との交流活動などが、すでに実践されていますが、学会と社会をつなぐ手段には、もう一つ重要な経路があります。それは、個々の会員が持っている社会との接点を生かすということです。企業に属する会員は製品の開発・販売を通して、また大学に属する会員は学生との交流を通して、それぞれ社会の風を感じているでしょう。これらは必ず学会の活動に生かせるはずで、私は、これらネットワークの活用も含め、学会外部とのコミュニケーションをさらに充実させていきたいと考えております。

一方、会員が研究や技術開発を行う上での障壁は、不幸にして先端科学の埒外にも広がっています。若手研究者のキャリアパス、老朽化した施設の維持管理、世代間の技術継承のあり方などは多くの会員が感じている問題かと思えます。学会は社会への貢献を目指していますが、同時に、会員にとっても役に立つ組織でなければなりません。会員との対話を通じて、これら問題点を把握することも会長の仕事の一つと心得ます。会員が抱える問題を共有し解決の糸口を探るのも学会の大切な役割です。

社会的動物と言われる人間にとって、コミュニティの存在は欠くことができません。2004年に始まる日本加速器学会の歴史はまだ浅いというものの、その設立に尽力された先輩方をはじめ、約900名の会員の科学技術にかける思いは、科学史を彩る著名な科学者たちと何ら変わりがないことを、私はこれまでの皆様との交流を通じてよく知っております。会員にとって日本加速器学会が、加速器科学、加速器技術の高みを目指す仲間たちの息吹を感じる場でありつづけるよう、会長の職務に精励することをお約束します。

* 量子科学技術研究開発機構